

仲程昌德

疏書

B O O K S O N B O O K S

探求

新泉社

昌德

書

B O O K S O N B O O K S

新泉社

著者略歴

仲程昌徳（なかほど まさのり）

1943年、南洋テニアン島カロリナス生まれ

1974年、法政大学大学院人文科学研究科修士課程修了

現在、琉球大学教養部教授

著書『沖縄近代詩史研究』（新泉社、1986年）

『沖縄文学論の方法』（新泉社、1987年）ほか多数

琉書探求

1990年10月15日・第1刷発行（初版2000部）

定価1800円＋税54円（税込1854円）

著者＝仲程昌徳

発行所＝株式会社 新泉社

東京都文京区本郷2-15-20

振替・東京 7-160936番 電話 03 (812) 1662 FAX 03 (815) 1422

印刷・萩原印刷 製本・関山製本

琉書探求 目次

I

なつかしい本の話	6
手書きの歌集	12
本や雑誌を採す	15

II

山城正忠のこと (1)	26
中山省三郎「沖縄詩鈔」	29
『茨城近代文学選集』と沖縄	32
「琉球」と「沖縄」	35
内田暮情の「琉球絵図」	43

川崎市立中原図書館	46
山城正忠のこと(2)	54
雑誌『構想』と沖縄	57
首里詩篇	60
伝説上の雑誌『黒煙』	63
『南島覚書』序	66
詩人の住所録	69
ある投稿詩	75
琉球の「女」	78
台風文学集	82
山之口貌の懸賞小説	85
『詩文学』と沖縄	88
埋もれた投稿詩	96

宮城聡と石野径一郎 ————— 99

『文学界』と沖縄 ————— 102

詩人・波照間礁 ————— 107

「さまよへる琉球人」と「闘へる琉球人」 ————— 110

文芸時評から探す ————— 113

新屋敷幸繁「一月の朝」 ————— 118

沖縄出身の詩人たち ————— 121

『文章倶楽部』の口語短歌 ————— 129

仲村渠の飛躍と投稿詩人 ————— 132

桃原邑子と自由律短歌 ————— 141

『短歌研究』のことなど ————— 147

幻の詩集・山口芳光『母の昇天』 ————— 168

新屋敷幸繁と『日本文学』 ————— 171

沖繩詩人の道程——174

山口由幾子「沖繩をおもふ」——177

尚文子と『心の花』——180

闇の中の沖繩短歌史——183

山里永吉「心中した琉球王」——189

山之口獏の短歌——192

Ⅲ

雑誌渉獵・一九二七年～一九四五年——198

あとがき——215

なつかしい本の話

話は、海賊版から始まる。沖繩が、まだ占領下にあった時代である。

海賊版といい、占領下といい、何とも大時代的な物言いであるが、ドルを通貨とし、書物を買うにも、一々計算しなければならなかったという時代である。後、東京に出てもその癖が直らず、値段を聞き、度々店員に変な顔をされて、うつむかざるを得ないという、実に情け無い思いをするようになるが、そんなおまけ付きを、養ってくれた時代のことである。

その頃、東京から沖繩に帰ってきて、ある私立高校の先生をしていた方が、海賊版を作った。私たちが喜んだのは勿論である。当時私たちは、オモロという殆どわけのわからないウタに浮かされていたが、そういう奇妙な情熱が、東京で学問のきびしさを身につけてきた方には、あわれにうつったのである。

その方が、ある日、緑色の表紙の小型の本を私たちに配ったのである。私たちは、目をみはり、多分歓声をあげたかと思うが、それは、幾度となく話題になりながら、まだ見たことのないものだった。

小型本は、なんと『琉球聖典おもしろさうし選釈』であったのである。今思うと、何と本のない時代であったかと慨嘆したくもなるが、それは誠にありがたいものであった。オモロが、どれだけ理解できたかどうかはともかく、その本によって、実に多くのものを学んだのである。

書物の話が出ると、私たちはすぐにその本のことを思い出す。原本は、大正十三年十二月、石塚書店という沖縄の本屋さんから四六版クロス装で出ているそうであるが、それは見たこともない。

海賊版は、私たちの宝物であった。ことあるごとに、私たちは、その本を誇り、見せびらかしもしたもののだが、何としたことか、その本を紛失してしまったのである。何処かで忘れたという記憶もない。貸した記憶もない。それなのに、見つからないのである。

それにしても、と思う。

今なら、コピーというのがある。『琉球聖典おもしろさうし選釈』の海賊版は、多分、写真をとり、焼付け、製本するというてまひまのかかったものであったと思うが、その情熱はどこから出てきたのだろうか。勿論、海賊版を作って儲けてやろうなどという魂胆があったとは思えない。私たちは、金を払った覚えもないし、払える金もないという、貧乏学生だったからである。それゆえ、オモロ・オモロと騒ぎながら、オモロの基本文献すら知らない私たちをあわれに思っ作ってくれたのだろうと思わざるを得ないのである。

そういう書物も、やはり海賊版なのだろうか。正規のルールを踏んで、作られたものではないということからすれば、そうとしか言い様がないにしても、営利を目的とするものではなかったことから

すれば、海賊版とは言えないのかもしれないのである。

何度も読み返した、緑の表紙の小型の本。思い浮かぶ章句。例えば、ある一篇など、翻訳しようと思いつながらそれかなわず、とうとう童謡にしたといい、自作を示した後で「私は古琉球人の世界に這入るのは、子供の世界に這入るのと同様に、至難な業であることを切に感じてゐる。彼等は自然といふお母さんの暖い懷の中に育まれて、絶えず彼女の胸に耳をあてゝゐたので、彼女の中に流れる旋律の波音を聞く事が出来たのだ。そしてこれと共鳴して波打つた彼等の魂の旋律が言語に発してオモロとなつたのだ」というような部分。

オモロそのものを知つたというよりも、「魂」のありかを教えられた本。やがて、私たちは、それぞれの道を歩むようになり、オモロにも別れを告げるが、何としても忘れたい本である。

『おもろさうし選釈』は、今、『伊波普猷全集』第六巻に入っていて簡単に読むことはできる。しかし、それは、どうしてもあの緑の表紙の小型本でないと、心にしみる感がしない。本というのは不思議なものである。

その本が、消えてしまったのはやはり淋しい。

○

これもまた、消えてしまった本の話。

私たちは、ロシア文学好きであった。いつの時代の文学青年たちもそうであったごとくに、私たちもまた、夜を徹して、ロシアの小説を論じ、日本の小説のみみっちさを慨嘆したりしたのである。そして、行き着くところは、どういうわけかあの絞首台からの帰還についてであった。時代というのもあったのであろう。

私たちは、大学を出ると国語教師になるしかなかった。そして、国語教師になるためには、どうしても国語学概論というのをとらなければならなかった。最初の時間、教室を間違つて失敗してしまった私たちは、それだけで、既に意気沮喪していたが、次の時間には、ほぼ、その単位を取得するのを断念してしまった。全く歯がたたなかつたのである。教室にはあいかわらず出たが、講義はほとんど理解できず、席にすわって、ときたま頷いたり、いつの間にか船を漕ぐといった態であった。

そして、予期していた通り、成績簿に不可がつけられ、それだけがいやに目立った。目の前にぶら下がっていた国語教師への道が遠のいたのは、さして気にしなかつたが、わからないまままで引き下がるのは、屈辱ものだと思えた。それ以後、何度挑戦したのだろう。やっと、不可を免れた時には、既に国語教師になることをあきらめていた。

いわば、将来が見えなくなつて、淋しくなつていたのであろう。大袈裟に言えば、将来を悲観し、絶望していたのである。ロシア文学の話が、絞首台からの帰還でもって終わるのも、将来を奪還したいという思いとつながっていたためかも知れない。

そういう時期、私は、国語学概論の教授の研究室から、一冊の本を持ち出した。それは、教授の研

究や講義と関係するような物とは全く関係なく、教授が刊行した本であった。如何にも、紙のない時代に出版されたような粗雑な表紙に、触れるとぼろぼろになりそうなセロファンが被されて、本棚の中で埃に埋もれていたのを、手に取ったのである。私は、躊躇することなく持ち出した。そして、下宿の暗い三畳の部屋に帰り、読みながら身震いしたのである。

阿鼻叫喚の地獄というのはある。しかも、それはそう遠い時代のことではなく、ついこの間のことであり、その地獄を潜って来た人が、目の前にいる。身震いと共に、何故か、わけのわからない淋しさが込み上げてきた。

『沖繩の悲劇——姫百合の塔をめぐる人々の手記——』が、その本の題名である。東京の華頂書房から昭和二十六年七月に刊行されたもので、黄色をバックに石積みの台に十字架が載せられた塔を中心に、両側から蘇鉄や雑木が描かれ、血の色の四角い枠の中に、白抜きで恐らく著者自身のペン字になる題名が記されていたその本は、地獄を生き延びた人々の手記の生々しさとともに、身を切られるような思いで書かれた著者の文章が、私たちを圧倒した。

著者は「生きのびた命の底には悲しみが深淵のようにたたえられている」といい、「悠久の過去から刻々にくり出されている」命について思う。六月十八日、砲弾で吹き飛ばされ、意識不明におちいる。同僚に介抱され、意識を取り戻した時、首筋に血がながれていて、頸動脈からわずか半センチほどの間に命がかかっていたことを知る。それはまさに奇跡と呼ぶしかないものであったと言えるが、そういう体験をし、命の尊厳について考えつめた人が、目の前にいたのである。

私たちの心の中で何かが、変わり始めていた。

ロシア文学の季節も、そして同時代の誰も、が駆り立てられた焦燥や失望も、まだ続いていたが、何かが明らかに変わり始めていた。

綴じ糸が切れて、ページがはみ出し始めた本は、元の本棚に帰っていかなかった。手放すまいとは思ったし、これを支えにしたいと考えたのである。

そういう本が、消えてしまったのである。

華頂書房版は、その後、東邦書房版、文研出版版、そして角川書店版と版をかえ、現在角川文庫に入っている。版が変わる度に、手記が増補されていたが、ことあるたびに思い浮かぶのは、黄色い表紙の華頂書房版である。

手書きの歌集

歌集など世の中にはあふれるほどある。豪華本から、ワープロ版の手作りまで、有名な歌人から無名の歌人まで、種類も内容も様々な歌集のあることは判るが、ちょっと変わった歌集の話である。

仲宗根政善は、学者である。学者が、歌集を出したのである。学者が歌集を出すのは、折口信夫の例を持ち出すまでもなく、何も特別な話ではないが、その歌集が、ちょっと変わっているのである。

あれは多分博文館の文芸日誌であると思うが、その文芸日誌に書き留めた歌を、そのまま使って、複製版のようなのにしているのである。いわゆる手書きをそのまま用いているのである。こんなことをいうと、出版社に叱られそうであるが、コピーを製本し、海賊版を作ったようなものである。

しかし、当然のことであるが、コピーでは、こんな本など作れない。何故なら、文芸日誌に書き留められた歌は万年筆、ボールペン、鉛筆というように、異なるものを以て綴られていて、その濃淡の差が激しく、コピーでは、簡単に処理できないものであり、歌集はそれを統一するための細心の技術が駆使されているからである。

手書きをそのまま使って本にするのは、費用は別にして活版印刷本を作るより、面倒この上ないはずである。それを、やすやすとやってのけたのである。

それを今、手書き本と呼んでおくことにするが、手書き本には、活字本にない味わいがある。文字の個性もあるが、書き直しや、書き崩し、果ては何が書かれていたかわからなくなるまで塗り潰したような箇所が所々あって、それがまた、何ともいえない感じを出しているのである。

私たちは、何故か自分がひどく不幸だと思う時がある。自分がうすみともなく、無様で、みじめこのうえないと思い、ふさぎこんでしまう時がある。しかも青春の真っ直中にある。私にもやはり、普通にそういう青春があって、一人バスに乗って、遠くへ行ってしまったかと思ったりした事がある。そういう時である。

今は、もうないであろうが、あったにしても、もはやその写真など変わってしまったているであろうが、戦跡で、売られていたハガキに擦り込まれていた一首の歌に私は泣いた。その歌は「いはまくらかたくもあらむやすらかにねむれとそいのるまなひのとは」というのである。

作者が、誰なのか、その時はわからなかった。記名されてなかったし、またわかる必要もなかった。胸がしーんと静まりかえり、ほろほろと涙が落ちてきたのである。誰にもまた、わけのわからない時代というのもあるのである。

手書き本の中扉に、著者の毛筆になるその歌を見た時、涙はもはやでなくなっていたが、わけのわからない時代のあったことを思い出したのである。

歌集は、沖繩戦と関わる歌が多い。戦争が忘れられないのは、その体験が希有であったことによるとはいえ、それ以上に、沖繩が、基地を抱えているという現実によるはずである。そして、戦争に直結するものを許しがたいとする思いが、戦争を歌うことをやめさせないといえる。

そういう戦争の歌に混ざって父母を恋ふ歌と共に「吾とともにとはに滅びむことはを日に夜をつぎて書きとめて行く」という、一九七八・九・十八の日付の入った歌も見られる。それは、やがて結実する方言辞典の仕事を歌ったものであったが、歌は日録にもなっている。

歌の解説はともかく、手書き本は、直に筆者の思いを伝えてくれる気がするだけでなく、あと一つ大切なことを教えてくれた。最初から最後まで目を通していけば自ずからわかることなのであるが、美しい字体が、あとでは揺れ始めているのである。

その揺れを見るのは、淋しい。しかし、勇気を与えてくれる。

『蚊帳のホタル』（一九八八年十月二十日初版発行、沖繩タイムス社刊）、それがここで少々宣伝しておきたいその歌集の題名である。